明治期「理想画」のモード選択 ―― 黒田清輝《智、感、情》の周囲

Ⅰ　聖性と油彩

これまで見て来たような、一九世紀のフランスに於ける聖性表現を巡るモードの問題は、キリスト教絵画ではないジャンルに於いて如何なる射程を持ちうるか。本章ではこの問題を、明治期の洋画を例に考えてみたい。

一八九〇（明治二三）年に第三回内国勧業博覧会に出品され、のち護国寺に奉納された原田直次郎の《騎龍観音》（図1、護国寺蔵・国立近代美術館寄託）を目にする時、今日少なからぬ人々が何か奇妙な違和感を覚えることは、例えば近年刊行された日本美術全集のこの作品に関する記述の中に「その不思議な絵画的魅力」といった一節があることからも伺われる[一]。尤もこれは何も原田の作品に限ったことではない。原田と同じ一八八七（明治二〇）年にフランスから帰国した山本芳翠が、一八九三（明治二六）年に第七回明治美術会に出品した《浦島図》（図2、岐阜県美術館）を始めとする明治中期の歴史画は、「ひとむかしまえなら、とても人寄せの看板にはなりがたい」し「美術愛好家の感性をさかなでしそうな作品」であった[二]。

これらの作品が持つグロテスクまでのなまなましい印象は、それらが日本的な主題を、西欧油彩画の技法

図１　原田直次郎《騎龍観音》1890（明治 23）年、護国寺、東京国立近代美術館寄託

一　《騎龍観音》の図版解説（三輪英夫）、高階秀爾、小林忠、三輪英夫他編『日本美術全集　第二一巻　江戸から明治へ　近代の美術Ⅱ』講談社、一九九一年、一九八頁。

二　丹尾安典「"異端図"たちの逆襲」『芸術新潮』一九九四年三月、一二頁。